

Salon

Vol.94 2015年1月 新春号



ホール2Fホワイエ壁面 ポール・ゴッアマン作「ダンサー」

CONTENTS

- 01 Prime Interview — 森 悠子
- 03 Phoenix Presents — パーカッション・トゥデイ 中村功と仲間たち vol.5
- 05 Pick Up
- 06 Phoenix Spot — 「未知」の楽器、ドイツ音楽を通して探る 笠川 恵
- 07 Essay de say — 「練習」 森下幸路

「古巣」の仲間と5年ぶり共演 京都フランス音楽アカデミー創設者・ヴァイオリニスト 森 悠子さん

京都フランス音楽アカデミー

パリに本部を置くフランス外務省芸術文化活動協会(現アンスティチュ・フランセ)や有志による支援のもとで設立された日仏音楽交流事業。内外の企業などからの資金を抛出・助成も受け、開催している。期間は概ね毎年3月下旬から4月上旬にかけての2週間弱。主会場は京都市左京区のアンスティチュ・フランセ関西(旧関西日仏学館=京都市左京区吉田泉殿町8)。公募で選ばれた弦楽器・木管楽器奏者やピアニスト、声楽家ら約百人が短期集中型のマスタークラスで指導を受け、公開公演で学習成果を発表もする。修了者は延べ2千人を超えている。フランスの行う音楽教育事業としては、最大級の規模を誇り、クオリティが高く、歴史もある音楽教育事業とされている。実行委員長は、シャルランリ・ブロー在京都フランス総領事/アンスティチュ・フランセ関西館長。講師による公演は従来、京都のほか、東京や名古屋、大阪、横浜などで開催。アカデミー生による公演で1998年にはリヨンのオペラハウス、2000年にはパリ・シャトレ劇場に巡演したこともある。

「京都フランス音楽アカデミー」。毎年、桜の季節、東山の百万遍にフランスの名演奏家を講師に迎え、フランス音楽の精髓を日本の若い音楽家に伝える教育プログラムだ。創設から4半世紀を經過、講師陣や受講生のコンサートは春の音楽風物詩として定着した。創設者は高槻出身、京都在住の世界的ヴァイオリニスト森 悠子さん(元リヨン国立高等音楽院助教授)。20代半ばで渡欧、フランス拠点に国際的キャリアを築く一方、日仏を往還し活動を広げてきた。この事業は亡き恩師との約束を果たし、同時に日仏の架け橋としての使命を模索する中で構想、多くの人々の協力を得て立ち上げた。初回から音楽監督を務めていたが2011年春、執行組織の当時の幹部による体制変更に伴い、辞任した。しかし日本の音楽社会の中で、彼女にとってこのアカデミーは、またアカデミーにとって彼女は、欠かす事のできない重要なパートナー。フランス楽派の豊かな音楽によって、日本の音楽界に活気をもたらしたい。そう期した設立理念が十全に体现されてこそ、事業の存在価値は大きい。4年のブランクを経た4月4日(土)の大阪公演で、森さんとアカデミーとの協働が「復活」する。(あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール 谷本 裕)

もり・ゆうこ 教育哲学者・森昭の次女として、高槻市に生まれる。6歳より才能教育(鈴木メソッド)でヴァイオリンを始め、吉富周吉、山本剛史、東儀祐二、鷺見三郎、齋藤秀雄の各氏に師事。桐朋学園大学を卒業し、齋藤秀雄教授の助手を務めたのち、旧チェコスロヴァキア、フランスに留学。マリア・ホロニョヴァ、ミシェル・オークレールの両氏に師事。1974年パイヤール室内管弦楽団入団、第2ソリストとしてヨーロッパ各地を回る。同時期、古楽器演奏の黎明期のパリで、本格的な古楽器の演奏にも関わり、多くのレコーディングに参加。77~87年フランス国立新放送管弦楽団(現・フランス国立放送フィルハーモニー管弦楽団)に在籍。89~96年リヨン国立高等音楽院助教授。90年京都フランス音楽アカデミーを創立し2010年まで21年間音楽監督を務め、11年辞任。1997年、地方から文化発信の理念に基づき、「若い音楽家の育成と実践の場」であり「常に世界に発信できる演奏団体」を目指し、長岡京室内アンサンブルを設立。99~04年ルーズヴェルト大学シカゴ芸術大学音楽院教授。2000年CEM音楽道場を企画・主宰、キャパシティビルディングなどさまざまな講習会を開講。2009年特定非営利活動法人音楽への道CEMを設立し、理事長に就任。長岡京室内アンサンブルを母体に演奏会、講習会、子ども向けプログラム(プロペラプロジェクト)などを立案し、実践。13年より、指揮者の飯森範親氏とオーケストラ・室内楽特別セミナーを行う。91年フランス政府から芸術文化勲章「シュヴァリエ章」を受ける。02年「京都府あけぼの賞」受賞。03年フランス政府から芸術文化勲章「オフィシエ章」を受ける。09年より、くらしき作陽大学音楽学部特任教授、12年より同専任教授に就任。11年10月より、淡路音楽塾指導者。10年には「ヴァイオリニスト 空に飛びたくて」を春秋社から出版。

「フランス音楽の名手たち 京都フランス音楽アカデミー 過去・現在・未来」公演は、2015年4月4日(土)午後4時開演。入場料4,000円(指定席)、友の会3,600円。学生1,000円(限定数)。ザ・フェニックスホールチケットセンターのみ取り扱い。お求め・お問い合わせは同センター(電話06・6363・7999 土・日・祝を除く平日10時~17時)。企画制作協力:京都フランス音楽アカデミー実行委員会、アンスティチュ・フランセ関西。

■プログラム

フランセ:弦楽三重奏曲

シルヴィー・ガゾー(ヴァイオリン)、ブルーノ・バスキエ(ヴィオラ)、ドミニク・ド・ヴィリアンクール(チェロ)

ラヴェル:ソナチネ、ドビュッシー:練習曲集 第2巻

ジョルジュ・ブルーテルマッハー(ピアノ独奏)

ショーン:ヴァイオリン、ピアノ、弦楽四重奏のための協奏曲 二長調 作品21

石上 真由子(ヴァイオリン独奏)、

ジョルジュ・ブルーテルマッハー(ピアノ独奏)

シルヴィー・ガゾー(第1ヴァイオリン)、森 悠子(第2ヴァイオリン)

ブルーノ・バスキエ(ヴィオラ)、ドミニク・ド・ヴィリアンクール(チェロ)

恩師との約束、古都で開花

森さんは1970年、桐朋学園から欧州に留学し、パリではパイナル室内管弦楽団やフランス国立新放送管弦楽団に在籍、またリヨン国立高等音楽院助教授を務めるなど、本場の舞台や高等教育研究機関でフランス音楽を学び、奏で、また教えてきた。筋金入りの本格派だけに、アカデミーの設立役となったのは順当にも思えるが、直接の契機は何だったのだろうか。

桐朋学園の恩師、齋藤秀雄先生が亡くなる直前、「日本に戻って教育に携わる」と約束したことが大きい。留学前、私は先生の助手をしていました。東京で東欧出身の演奏家にレッスンを受け、留学したくなったんですね。既に26歳、音楽の作り方や奏法については、見極めがつくようになっていました。先生は、弦楽器を弾く折の左手の使い方(運指)は完璧に教えられた。でも弓の動きを司る右手の使い方は、十分には教えられないことを自覚されていた。「右手を教えらるる人に成りなさい。その原点を学んでおいで」と送り出されました。でも、パリで就いたオーケストラル先生(*)には「あなたはまだ、学校で学ぶ必要はない」と言われた。オーケストラやアンサンブルの仕事を紹介して下さり、私は演奏家としての活動を始めることが出来た。74年のある日、齋藤先生から電話が掛かってきました。「すぐに帰って来てくれ」。苦しい声。ガンでした。私を呼び戻し、教育活動の後継ぎにと考えられたのかもしれない。でも、仕事でツアーに出ようとしていた矢先です。まだ何も学べていないという気持ちも強く、「40歳まで待って下さい」と答え、受話器を置きました。1週間後、齋藤先生は亡くなりました。

時は流れ、森さんは活動の場を広げる。様々な室内管弦楽団での活動、作品が生まれた当時の楽器と奏法で演奏する「古楽」への傾倒、音楽祭への出演、フランス国立放送新管弦楽団メンバーとしての活動…。87年には、小澤(征爾)さんの呼び掛けで齋藤さんの弟子が集まって演奏する「サイトウ・キネン・オーケストラ」の欧州ツアーに参加。充実の最中、あの約束に直面するのである。

宿泊先のウィーンのホテル前で、先生の奥様・秀子さんがメンバーを出迎えられ、声を掛けてこられた。「悠子さん、約束を覚えてらっしゃるでしょう?」。もちろん覚えていました。自分に何が出来るか、あの日から毎日考えて過ごしていました。でも日本を離れて久しく、帰りたいけどポストはない…。曖昧な返事をしました。ツアー中も、言葉が耳から離れない。パリに戻り、すぐ楽団に辞表を出しました。当時はまだアカデミー構想などありません。でも待遇に恵まれ、居心地良いオーケストラに在籍を続けたら、約束は実行できなくなる。在職10年の区切りでもありました。翌88年、パリを起点にロンドン、エッセン、プラハなどを丸一年かけ、時を遡るように逆に旅しました。留学や仕事の大切な思い出が残る場所。そこで得た教訓や知恵を思い、日本に何をもちたらず事ができるか考える。私なりの「巡礼」です。お世話になったフランス

にお返ししたい。そうだ、名手を京都に招き、フランスの音楽観や音色・響き、技術を伝えてもらおう。これなら先生もきっと納得して下さる、と。

アイデアの源には、自身の体験がある。フランスでのキャリアのはじめ、自分のヴァイオリンの音色や響きがフランス人とは異質なのに気づき、日本で修得した奏法や考えを引っ張り返さなくてはならなかったのだ。

ノルマンディーの或る室内管弦楽団にエキストラに行った時のこと。リハーサルで弾き始めると、周囲が私の音を聞いて怪訝な顔をする。フランスの楽団はどこも木管セクションの響きが温かめで柔らかい。弦楽器奏者は、それに相応しい音色を自分で聴き取り出し、溶け合うように弾かなくてはならない。なのに私は、カーッと突立つような硬い音。ソリスト志向の日本では、良しとされていたのですが、そこでは感覚がズレている。隣席の奏者を見ると、弓の持ち方やボウイング(弓遣い)が私と違うんです。フランスには「フランコ=ベルギー派」という弦楽器奏法の流派がある。ルーツはバロック時代に遡る。ギトリスやカントロフ、デュメイといった現代の名手たちまで連綿と受け継がれ、摩訶不思議な柔らかで艶やかな音色が特徴。彼らの奏法は、私が日本で習ってきた流儀とは別。いきおい、出てくる音も違う。それだけじゃない。ハーモニーについては彼らは各調性ごとの色彩感覚が鋭く、澄んだ響きを好む。リズム・拍については融通無碍で、弾力的なところがある。こうした点も違っていました。「このままだと聴き合えないし、ハモらない」。危機感を持って学んできたのは、こうした事柄です。日本の音楽大学や高校では、恐らく明治期に中欧から導入され、受け継がれてきた音楽教育が長く主流で、フランス流の音楽づくりはあまり顧みられてこなかった。それならば、フランスの大家にフランス流を教えてもらう営みは、音楽の多様性を示す上では短期でも意味があるだろう。日本はコンクールの存在が大きく、親も子もひたすら「戦い」の準備に大半のエネルギーを費やす。しかし、そんな形で国内で身に付けた演奏も、海外ではなかなか通用しない現実がある。こうした状況に向け、もっと違う、豊かな音楽の在り方を提案したい。「アンチテーゼ」を、さまざまな文化をはぐくんできた日本の古都から発信したい。そんな気持ちもありました。

1990年、森さんはアカデミーを立ち上げる。運営には、実に多くの人々の協力が不可欠だった。趣旨に賛同したフランス人講師はもちろん、場所や資金を提供してくれる関西日仏学館、助成を決めた企業、受講生を送り出してくれた日本の音楽教師、選考・審査に携わる演奏家、そして事務局スタッフ。実に多くのドラマがあった。初回アカデミーの講師は右上の表の通り。フランス楽派を代表する名手、正にスーパーソリスト揃い。アカデミーの「志」が伺える。受講生は13歳以上の148人。期間は12日間だった。「1年の留学に匹敵する12日間だった」「自分の感じたことを素直に、自然

■1990年に行われた初回の京都フランス音楽アカデミー講師陣

パート	名前	当時の所属
ピアノ	ジャン=クロード・ベヌスティエ	パリ国立高等音楽院教授
ヴァイオリン	ビエール・ドゥカン	パリ国立高等音楽院教授
	ロラン・ドガレイユ	フランス放送新管弦楽団コンサートマスター
ヴィオラ	ブルーノ・バスキエ	フランス国立管弦楽団首席奏者
チェロ	アラン・ムニエ	パリ国立高等音楽院教授
フルート	レイモン・ギヨー	パリ・オペラ座管弦楽団首席ソロ
オーボエ	ビエール・ビエルロ	パリ国立高等音楽院教授
クラリネット	ミッシェル・アリニオン	パリ国立高等音楽院教授
トランペット	ビエール・チボー	パリ国立高等音楽院教授
声楽	クリスチャンヌ・エダ=ビエール	パリ国立高等音楽院教授
音楽監督	森悠子(ヴァイオリン)	リヨン国立高等音楽院助教授

に、人に分かるように表現することの大切さを知った」「このアカデミーで先生と出会ったことによって音楽観、人生観が変わった」「今、何かが自分の中で動き始めていると感じている」。当時の受講生の残した言葉からは、アカデミーがもたらした喜びが伝わってくる。森さんはその後も、フランス楽派を今に伝える様々な講師を選び、起用してきた。2004年からは自身が心血を注いだ古楽演奏のクラスも開講するなど新機軸を打ち出し、若い演奏家を触発してきた。今後も高いクオリティでの進展を願っている。

このアカデミーで、人生が変わったという音楽家は少なくないでしょう。講師との出会いをきっかけにフランスに留学した人も多い。私は、コンクールはあまり好きではありませんが、ここで学んだ人からはロン・ティボーの小林美恵さん(ヴァイオリン)、モスクワのパガニーニの米元響子さん(同)、ルツワフスキの中木健二さん(チェロ)といった国際コンクールで優勝した人が出ています。東京交響楽団のコンサートマスターを務めた高木和弘さん(現・ダラス室内交響楽団コンサートマスター)や東京藝術大学准教授の玉井菜採さんら、オーケストラや教育分野で活躍する人もいます。

さて今回の公演で森さんは、アカデミー講師で旧知のブルーノ・バスキエ(ヴィオラ)やジョルジュ・ブルデルマッハー(ピアノ)と久々に再会、さらにシルヴィー・ガソー(ヴァオリン)やドミニク・ド・ヴィリアンクール(チェロ)といった新顔を交えた共演に臨む。プログラム(左頁参照)で注目されるのが、ショーソン作曲の「コンセル」(ヴァイオリン、ピアノ、弦楽四重奏のための協奏曲 二長調 作品21)で独奏を受け持つ京都在住の気鋭ヴァイオリニスト石上真由子さんである。

2007年から5回、アカデミーに参加した逸材です。いま、京都府立医科大学に在籍する医学生ですが、日本では稀に見るような、自由な演奏をする。コピーではなく、自分自身のイメージネーションで音楽をつくり出す点がフランス流に近い。私がこれまでに見たことがないような、とてつもない才能。彼女がとつても好きだというこの作品をどう弾いてくれるか、楽しみにしています。

協力・資料提供:京都フランス音楽アカデミー実行委員会、長岡京室内アンサンブル

(*)ミッシェル・オーケール 1930年パリ生まれのヴァイオリニスト。パリ国立高等音楽院でジュール・ブーシェリに師事、13歳でロン・ティボー国際コンクール優勝。30歳を過ぎ演奏を引退、後進の指導にあたる。



1月30日(金)
10:00 受付開始
ザフェニックスホール
友の会優先予約

2月2日(月)
10:00 受付開始
イーフェニックス
E-PHX優先予約

2月3日(火)
10:00
一般発売

インターネット予約、ご来店による
お申込みは2月4日(水)10:00から!

■Kansai Soloists & Ensembles 18

協力:阿倍野区王子地区だんじり委員会

2015年7月31日(金)

19:00開演 指定席
一般 ¥4,000(友の会価格 ¥3,600)
学生 ¥1,000(限定数)

出演 中村功(打楽器ほか)
阿倍王子神社(だんじり囃子)
マルゴリズム(サンバ)
宮川彬良(ピアノ/作曲)

大阪でだんじり囃子、東京でサンバやミュージカル。「世界のナカムラ」の、原点を聴く。
パーカッション・トゥデイ 中村功と仲間たち vol.5

「だんじり、サンバ、宮川彬良」 曲目 宮川彬良:ピアノと打楽器のための新作世界初演
イブライン・ゼレー:エビの喧嘩(作詞:永武哲弥) ほか

現代音楽シーンに欠かせない世界的名手・中村功プロデュースの打楽器プロジェクト。最終回は、彼の音楽ルーツを豪華メンバーとたどる。幼少期、母の背中で聴き、リズムに「開眼」した阿倍王子神社の祭り囃子。東京藝大在学中に教わり、衝撃を受けたブラジルの民族音楽サンバ。アカデミックな理論とアメリカンポップスを基盤に洗練されたサウンドを発表、中村と共演を重ねた同級生「アキラ」こと宮川彬良の、グルーヴな世界。贅沢な「祝祭サウンド」に、乞うご期待。



中村功(なかむら・いさお/打楽器ほか) ドイツを軸に活躍する、ヨーロッパで最も信頼と評価の高い打楽器奏者。1981年東京藝術大学、89年フライブルク国立音楽大学卒業。86年ダラムシュタット国際現代音楽夏期講習会で、クラニーヒ・シュタイナー音楽賞、92年度青山音楽賞特別賞、04年インハラホール公演「三井の晩鐘」で第4回佐治敬三賞受賞。シュトゥックハウゼン、ケージや、ケルン放送響など各地の名門オーケストラと共演。また、ベルリン音楽週間、ザルツブルク音楽祭など数多くの音楽祭で招待演奏を重ねる。95年「Duo Konflikt」、06年「Isao Nakamura Ensemble」、10年「中村功と仲間たち」を結成。後進の指導にもあっており、秋吉台国際現代音楽セミナー、ダラムシュタット国際現代音楽夏期講習会で常任講師歴任。92年よりカールスルーエ国立音楽大学教授、YAMAHAアーティスト。京都市立芸術大学客員教授、www.isaonakamura.jp



阿倍王子神社(あべおうじじんじや/だんじり囃子) 阿倍王子神社は大阪市の天王寺南にあり、仁徳天皇の創建と伝えられる。阿倍野の氏神、厄除開運の神として崇敬されている。古代豪族・阿倍氏の創建とも言われ、陰陽師・安倍晴明の生誕伝承地として知られる。神社の最大の神事は夏祭り子大祭。例年7月27日を宵宮、28日を本祭として行われ、中核をだんじり囃子(はやし)が担う。演奏には親太鼓・子太鼓・鉦(かね)を用いる。昭和28(1953)年、王子地区の谷智夫総代が能勢地方の壇尻囃子を基に創作。演奏した型が起源。現在は、阿倍王子神社氏子奉賛会王子地区総代の岡田昭夫委員長の指導下、王子地域活動協議会・王子連合振興町会が活動を運営。町内に住む子どもが、囃子方や曳子方(ひきこかた)として演奏する。威勢良い掛け声と鉦や太鼓の音が、疫病や厄災を祓(はら)う。



マルゴリズム(Malgorhythm/サンバ) 1980年代、日本のサンバ界で中心的に活躍したミュージシャン達が2014年に再集結。「観客と一緒に歌い、楽しむライブ」をコンセプトに、日本語で歌えるサンバ、新感覚のオリジナル曲で展開中。全員が楽器を演奏しながらコーラスにも参加するスタイルはサンバの原点にも通じる。笑顔がはじけ、聴衆を巻き込む一体感あふれるライブで注目されている。中村功の東京藝術大学在学中からの仲間であり、中村は初回ライブから共演。メンバーは中村隆志(ギター)、細谷要輔・西尾純之介・永武哲弥・西木戸哲弥・西村誠(以上パーカッション)、須山たつり(ギター/カヴァキニョ)、古川東秀(フルート/パーカッション)。



宮川彬良(みやかわあきら/ピアノ・作曲) 東京藝術大学在学中から劇団四季、東京ディズニーランドなどのショー音楽を担当。その後、数多くのミュージカルなどを手掛け、舞台音楽家として活躍。代表作に「ONE MAN'S DREAM」、「マツケンサンバII」、「身毒丸」、「ザ・ヒットパレード」など。全国各地で演奏も行っており、自身で作曲、編曲、指揮、ピアノ演奏、解説も交え進める公演に定評がある。2003-10年NHK Eテレ「クインテット」、09-10年NHK-BS2「どれみふぁあワンダーランド」、11-12年NHK BSプレミアム「宮川彬良のショウタイム」などテレビでも活躍。12年からアニメ「宇宙戦艦ヤマト2199」の音楽を手掛けている。

ホール主催・共催・協賛公演チケットのお申込み方法

06-6363-7999

土・日・祝日を除く平日の10:00~17:00

http://phoenixhall.jp/

チケットセンターのページからお申込みください

直接のご来店による
お申込み

- ザ・フェニックスホール友の会優先予約
 - ・ザ・フェニックスホール友の会会員様の優先予約日です(電話予約のみ)。
 - ・主催公演1公演につき会員お1人様2枚まで1割引でお求めいただけます。チケット購入の際、枚数制限はありませんが、3枚目以降は一般価格となります。
 - ・友の会への入会をご希望の方は、チケットのお申込み時にお電話でお申しつけください。同時に優先予約をお受けすることができます。その際、年会費1,000円が別途必要となります。

- E-PHX(イーフェニックス)優先予約
 - ・E-PHX(イーフェニックス)にご登録の方の優先予約日です(電話予約のみ)。
 - ・チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。
 - ・事前にザ・フェニックスホールホームページ、ホール会員のページからご登録ください。お電話でのご登録はできません。

- 一般発売
 - ・一般発売日は、電話予約のみのお申込みとなります。
 - ・チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。

- インターネット予約(主催公演のみ)
 - ・ザ・フェニックスホールホームページ、チケットセンターのページからお申込みください。
 - ・チケット予約フォームに記載のない公演につきましてはおそれ入りますがお電話でお問合せください。
 - ・ホームページ更新の都合により、完売表示のない公演でもお申込み時には完売となっていることもございます。どうぞご了承ください。
 - ・学生券のインターネットによるご予約は受付いたしておりません。
 - ・チケットご予約フォーム送信後、営業日3日以内に座席の有無、座席番号、入金方法につきまして確認メールを送りいたします。

・ザ・フェニックスホールチケットセンターはホール建物5階、エレベーターを降りて廊下右手です。



チケットお申込み後のお受け渡し方法 下記①または②のどちらかとなります。

- ①お申込み日から10日以内にザ・フェニックスホールチケットセンターへご来店ください。営業時間は土・日・祝日を除く平日の10:00~17:00です。
- ②先に郵便振込みをしていただき、入金確認後チケットをご郵送させていただきます。皆様のお手元にチケットが届きますのはご入金をいただいてから約10日後となります。その際、振込手数料はお客様にてご負担ください。尚、郵送は簡易書留(一律420円)のみとさせていただきます。

振込口座 00940-0-95351 加入者名 ザ・フェニックスホール

新年のご挨拶

みなさま 輝かしい新年を迎えられたことと存じます。昨年はあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールにご愛顧を賜り、誠にありがとうございました。今年も当ホールにご来場されます全てのお客様にご満足いただけるホールとして、スタッフ一同、一層の努力をして参りますので、どうぞよろしく願い申し上げます。みなさまにとりまして、この一年が素晴らしい年になりますようご祈念申し上げますとともに、ご来館を心よりお待ちしております。

2015年 あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール スタッフ一同

■フェニックス・エヴォリューションシリーズ73

主催 STUDIO M's

2015年7月4日(土)

16:30開演 自由席

一般前売¥3,500(友の会価格¥3,150)

一般当日¥4,000(友の会価格¥3,600)

学生前売¥2,500

学生当日¥3,000(限定数)



フェニックス・エヴォリューション・シリーズは、あいおいニッセイ同和損保株式会社(株)の芸術文化支援活動の一つです。同社が運営するあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール(大阪・梅田)での公演企画を公募、審査で選ばれた方にホールと付帯設備を無料で貸与致します。

バロックから古典派へ そして、その移行期に生まれた「奥様女中」

出演 重松みか、浅井順子、小泉文、藤井理紗、片桐直樹、竹内直紀、關口康祐(ピアノ伴奏)

曲目 G・B・ベルゴレージ:幕間劇『奥様女中』全幕 (演出:重松みか)

W・A・モーツァルト:オペラ『コジファントゥッテ』より「私は黒髪の方を選ぶわ」

オペラ『ティートの慈悲』より「私は行きます」

G・F・ヘンデル:オペラ『ジュリアス・シーザー』より「我が運命を嘆くでしょう」

A・スカルラッチィ:陽はすでにガンジス川から、私は悩みに満ちて、重(すみれ) ほか

一部ではバロック音楽の作曲家として名高いスカルラッチィ、バッハ、ヘンデルの歌曲、カンタータ、オペラから選曲します。その後、モーツァルトのオペラブッファから二重唱と、没した年に書かれたオペラアリアで一部を締め括ります。二部ではベルゴレージの代表的な作品である「奥様女中」をシンプルな家具、小道具と衣装で用い上演致します。モーツァルトのオペラブッファに引き継がれていったとされるベルゴレージの「奥様女中」は、丁度バロックの時代から古典派への過渡期に作曲されました。スカルラッチィはナポリ派の始祖といわれ、古典派に分類されるベルゴレージもスカルラッチィの伝統を引き継いだ名高いナポリ派のオペラ作曲家です。一部では緻密な音楽作り、二部ではアイデア溢れるドラマ作りでお楽しみ頂きたいと思ひます。

私達は、声そのものの技術的向上と音楽的充実を求め作品に向き合う、という極めて当たり前の、しかし、知らず知らず薄れてしまひやすい永遠のテーマに正面から取り組みたい、とする重松みかの考えに賛同しこのコンサートを企画しました。国内外で活躍する重松みかの日本人離れした歌唱力とシンプルでかつ歌い手を生かした舞台作り、端正な音楽性と存在感のある多彩な役作りには定評がある片桐直樹、美声で気品ある歌唱と豊かな音楽性で常に聴衆を魅了し続けている浅井順子に加え、それぞれの持ち味を持つ意欲的な若手達との饗宴を試みます。今持てる力とセンスで創造する一期一会のコンサートで、「音楽」と「空間」をお客様と共有出来ますことを願っています。

Phoenix
OSAQA
2015



弦楽四重奏公開マスタークラス&
受講生による修了コンサート聴講受付開始

未来のJSQをあなたの耳で感じてください!

「Phoenix OSAQA(Open String Academy for Quartet Artists 弦楽四重奏を志す若者のための自由塾)」は、国内トップ級のソリストでつくる実力派弦楽四重奏団「ジャパン・ストリング・クワルテット(JSQ)」を講師に迎え、公募、審査で選ばれた若手の弦楽四重奏団を指導・育成、あわせて聴衆の育成も図る教育・啓発事業を本年度も2015年3月に行います。また、このマスタークラスでは、レッスンの模様を間近に見て感じていただけます。その後、指導を受けた弦楽四重奏団による「修了コンサート」では、講師の指導で成長を目指す彼らの姿を、どうか見守ってください。皆様のお申込みをお待ちしています。(いずれも入場無料/要入場券)

■聴講申込受付期間

1月13日(火) 10:00~2月27日(金) 17:00 まで
(土・日・祝を除く平日10:00~17:00)

■講師

ジャパン・ストリング・クワルテット

久保陽子(第1ヴァイオリン) 久合田緑(第2ヴァイオリン)

菅沼準二(ヴィオラ) 岩崎 洸(チェロ)

■公開マスタークラス

2015年3月21日(土)・22日(日)

両日とも11:00開始(10:30開場)

■修了コンサート

2015年3月23日(月)

15:00開演(14:30開場)

出演/公開マスタークラス受講生

*すべて入場無料(要入場券・当ホールチケットセンターのみの取扱)

*出演者、スケジュール、演奏曲目など内容の詳細は、ホームページなどで紹介します。

*お申込は、お一人様各日4枚までとさせていただきます。

■会場

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

■お申し込み・お問い合わせ

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

電話 06-6363-7999(土・日・祝を除く平日10:00~17:00)

FAX 06-6363-1124

e-mail concert@phoenixhall.jp

*詳細はホームページ(<http://phoenixhall.jp/>)をご参照下さい。

発売中

ジャパン・ストリング・クワルテット コンサート 2015年3月20日(金)

14:00開演 13:30開場 入場料 ¥4,000(友の会価格¥3,600) 指定席

学生券 ¥1,000(限定数・電話予約可・当ホールのみ取扱) *茶菓つき

曲目 ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第6番 変ロ長調 作品18-6

弦楽四重奏曲 第9番 八長調「ラズモフスキー第3番」作品59-3

弦楽四重奏曲 第16番 へ長調 作品135

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール協賛公演のご案内 ザ・フェニックスホール友の会会員の方には割引特典があります。当日券をお買い求めの際は会員証をご提示ください。

協賛公演 関西二期会サロンオペラ第10回公演「ラ・ボエーム」 主催 公益社団法人関西二期会

発売中

2015年2月4日(水)、5日(木) 19:00開演 自由席 一般前売・当日¥3,000(友の会価格¥2,700)

出演 松浦修(指揮) ミミ: 金岡伶奈 奥田敏子
木川田直聡(演出) ムゼッタ: 松浦優 清水裕子
越知晴子(ピアノ) ロドルフォ: 越野保宏 瀬田雅巳
米田哲二(公演監督) マルチェロ: 鳥山浩詩 山咲響
ショナール: 内山圭介 吉田昌樹
コッリーネ: 神田行雄 大西信太郎
曲目 ペノア/アルチンドロ: 黒田まさき(両日)
プッチーニ: 歌劇「ラ・ボエーム」 助演: 岩本実奈子(両日)

毎回ご好評を頂いておりますこのサロンオペラ。これまでにオペラにふれたことのない方にも、気軽にプロの演奏を楽しんで頂くことをテーマに公演を重ねてきました。今回は、甘く切なくやるせない若者の恋を描いた純愛物語である名作「ラ・ボエーム」をお届け致します。プッチーニの流麗な旋律と共に繰り広げられる激しくもはかない恋に酔いしれてください。

協賛公演 ～ベートーヴェンから親愛なる人々へ～ 主催 IKEYAMAオフィス池山
金子鈴太郎×多川響子 チェロとピアノの為の作品 全曲リサイタル Vol.2

発売中

2015年3月8日(日) 14:00開演 自由席
一般前売¥3,000(友の会価格¥2,700) 一般当日¥3,500(友の会価格¥3,150) 学生前売¥2,000 学生当日¥2,500

出演 金子鈴太郎(チェロ)、多川響子(ピアノ)
曲目 ベートーヴェン: ヘンデルの「ユダ・マカベア」の「見よ勇者は帰る」の主題による12の変奏曲 ト長調 WoO.45
ホルン・ソナタ へ長調 op.17、チェロとピアノのためのソナタ 第4番 八長調 op.102-1、
モーツァルトの歌劇「魔笛」の「娘か女か」の主題による12の演奏曲 へ長調 op.66、
チェロとピアノのためのソナタ 第5番 二長調 op.102-2



好評を博したVol.1に続き金子鈴太郎(チェロ)と多川響子(ピアノ)によるベートーヴェンのチェロとピアノの為の作品全曲演奏会の後半です。今回はベートーヴェンの意欲的なソナタ第4・5番やチェロの楽しみを打ち出した変奏曲等です。ベートーヴェンをこよなく愛する若い二人の演奏でお楽しみください。ますます息が合っただけです。

協賛公演 オーギュスタン・デュメイ&関西フィルハーモニー管弦楽団
スプリング・スペシャルコンサート 主催 (特)関西フィルハーモニー管弦楽団

発売中

2015年5月7日(木) 19:00開演 指定席
一般前売・当日¥4,000(友の会価格¥3,600) 高校生(18歳)以下前売・当日¥2,000

出演 オーギュスタン・デュメイ(ヴァイオリン)、上田晴子(ピアノ)、関西フィルハーモニー管弦楽団
曲目 シューベルト: ピアノ五重奏曲「ます」(デュメイ、上田晴子、関西フィルメンバー) ほか



©HIKAWA

大阪の街中の「音の聖域」で、音楽監督デュメイ&関西フィルの魅力を体感していただくスプリング・スペシャルコンサート! 上田晴子のピアノ、そして関西フィルのメンバーたちとともに、デュメイが存在感満点のヴァイオリンで奏でるシューベルト「ます」を中心にお贈りいたします。あなたの目の前の緊密な空間で奏でられる、極上のアンサンブルを存分にご堪能ください。これぞ小規模ホールならではの醍醐味!

協賛公演 ヴィオラスペース2015大阪 主催 東京国際ヴィオラコンクール実行委員会
第3回東京国際ヴィオラコンクール入賞記念ガラ・コンサート 特別協賛 NTTファイナンス株式会社

2015年2/4(水) 発売

2015年6月9日(火) 19:00開演 指定席 一般前売・当日¥5,000(友の会価格¥4,500)
U25¥2,500(1990年以降生まれの方限定。公演当日、生年を証明できるものをご持参ください。)

出演 今井信子、鈴木康浩(以上ヴィオラ)、小栗まち絵(ヴァイオリン)、フランソワ・キリアン(ピアノ)
第3回東京国際ヴィオラコンクール第1位、第2位、第3位受賞者



曲目 未定
1992年、世界的ヴィオラ奏者・今井信子の提唱により、「ヴィオラの礼賛」、「優れたヴィオラ作品の紹介と新作発表」、「若手の育成」の3つをコンセプトに誕生したヴィオラの音楽祭『ヴィオラスペース』。2015年は、3年に1度の『東京国際ヴィオラコンクール』の年になります。ヴィオラの将来を担う若きヴィオリストたちの饗宴に、どうぞご期待ください!

「未知」の楽器、ドイツ音楽を通して探る

2月20日、ティータイムコンサート

「笠川 恵 ヴィオラリサイタル」に寄せて

笠川 恵



笠川 恵 (かさかわ・めぐみ/ヴィオラ)

相愛大学音楽学部ヴァイオリン専攻卒業後ヴィオラに転科。ジュネーヴ音楽院でヴィオラを今井信子氏に師事。2008年同音楽院ソリストディプロム最高学位を取得し修了。ライオネル・ターティスコンクール特別賞、ヴェルビエ音楽祭でヴィオラプライスを受賞。2010年よりドイツのフランクフルトに拠点を移しアンサンブルモデルンのヴィオリストとして活動中。

ドイツと言えば、今も昔もクラシック音楽の発祥の地としてその存在は変わりません。バロック時代にはバッハが、ロマン派にはシューマンが、近現代では Hindemith が、そして現代音楽では ツィンマーマン が、ドイツという国で多くの音楽を作りだしました。そして、現在も多くの作曲家が音楽家と共に、この国で音楽を作り出しています。

ヴィオラが誕生したのは、ヴァイオリンが出来たのと同じころ16世紀前半の北イタリアだと言われています。ルネッサンス、バロック時代には、膝に挟んで演奏するヴィオラ(ヴィオラ・ダ・ガンバ)と、顎にはさんで腕で支えながら演奏するヴィオラ(ヴィオラ・ダ・ブラッチョ)の2種類がありました。もちろん、現在のヴィオラの原型だと言われているのは、後者のヴィオラです。また、英語とイタリア語ではヴィオラ(Viola)と呼ばれますが、ドイツ語ではブラーチェ(Bratsche)と呼ばれ、原型のヴィオラ・ダ・ブラッチョからその名が受け継がれています。ブラッチェとは、腕という意味。その名の通り、腕で支えて弾くヴィオラという事です。

そのヴィオラは、18世紀の中頃まではオーケストラの中でしか、殆ど使用されていませんでしたが、弦楽四重奏の発達に伴い、室内楽にも欠かせない楽器となっていくます。そして、独奏楽器として認められるようになってきたのは、19世紀以降だと言われています。そのヴィオラの歴史に多大な影響を与えたのが、素晴らしい演奏家達。ライオネル・ターティス(1876-1975)、パウル・ヒンデミット(1895-1963)、ウィリアム・ブリムローズ(1904-1982)、また現代では日本を代表するヴィオリスト今井信子などです。彼らの存在がヴィオラという楽器を、陰の存在から独奏楽器という、重要な位置へ押し上げてくれました。彼らがいなかったら、今のヴィオラの位置づけは、全く違うものになっていました。

演奏家と作曲家は、どちらもお互いを必要とします。いくら素晴らしい作曲家がいても、それを作品として世に送り出してくれる演奏家がいなければ、誰もその良さを分かってくれません。逆に、極端な話ですが良い演奏家がいっても良い曲がこの世に存在していなければ、その力は宝の持ち腐れとなってしまいます。だからこそ、演奏家はその時代時代で、作曲家に曲を作ってもらい演奏し、それがその後今に至るまで、受け継がれていく事になります。

2月20日のコンサートでは、4曲取り上げます。その4曲のうち、2曲はヴィオラのオリジナル曲、その他は、他の楽器に作曲された作品です。先程も述べましたが、ヴィオラが独奏楽器として認められ始めたのは19世紀以降。バッハのチェロ組曲4番(チェロ)と、シューマンのアダージョとアレグロ(ホルンとピアノ)は、どちらもヴィオラのオリジナル曲ではありません。しかし、20世紀以降に作曲されたヒンデミットのソナタ作品25-4と、ツィンマーマンのソナタはヴィオラの為に書かれた作品です。この事からも、19世紀、20世紀以降になると、素晴らしいヴィオラ奏者が増えてきた事が見てとれます。

私は、4年前にドイツに移り住みました。その大きな理由は、アンサンブルモデルンという、現代音楽を中心に活動を続ける団体での演奏活動が決まったからですが、私はそのおかげで、多くの現役の作曲家との接点が増えました。そして、貴重な経験を沢山させてもらっています。「ああ、バッハが生きていて、電話でもメールでもして、疑問に思っている事をきいたらいいなあ」と思う事が多々有り、(もちろんそんな事無理なのですが)そうすると歴史を勉強して、多分こうだろうなと想像して弾くしかありません。しかし、現代は作曲家とコミュニケーションをとる事によって、曲の様々な事が、一瞬にして明確になります。私もこれまでに初演の機会がありましたが、本物は、本人に聞くのが一番。作曲家とのコミュニケーションを、大切にする様になりました。昔の名演奏家がそうして来た様に、こうやってヴィオラの歴史に足跡が残っていくのだと思います。

今回のコンサートでは、その当時の作曲家達の人生、音楽に対する思考、時代背景などを中心としたお話を交えながら、楽しい時間を過ごせる様に考えています。ピアニストとして、クラシックまた現代音楽の分野でも幅広い経験をお持ちの大宅さおりさんをお迎えして、未知の楽器ヴィオラをドイツ音楽、芸術を通して探っていければと思っています。「え?現代音楽?」と思う方でも、気軽に足を運んで頂けたら幸いです。お会い出来る事を楽しみにしています。

■笠川恵 ヴィオラリサイタルは、2015年2月20日(金)午後2時開演。入場料2,000円(指定席)、友の会1,800円、学生1,000円(限定数。ザ・フェニックスホールチケットセンターのみお取り扱い)。チケットのお求め、お問合わせは同センター(電話06-6363-7999 土・日・祝を除く平日10時~17時)。

[プログラム]シューマン:アダージョとアレグロ作品70、B・A・ツィンマーマン:無伴奏ヴィオラソナタ『天使の歌』、J・S・バッハ:無伴奏ヴィオラ組曲 第4番 変ホ長調 BWV1010(原曲:チェロ組曲 変ホ長調)、ヒンデミット:ヴィオラソナタ 作品25-4

練習

—森下幸路



Keizo Matsui

子供の頃は外で遊びたかった。玄関のカギを開けてもらえるのはヴァイオリンの練習をしてからで、高く手が届かないドアチェーンは無言の「練習せよ。」のサインだった。

両親は音楽家ではない。4歳からヴァイオリンを持たされたが、子供が進んで練習するわけもなし、毎日、母がつきっきりだった。毎日の課題ができるまで弾かされ、外遊びはお預け。怒られて涙のたまった目では楽譜がぼやけて、よく見えないということもそのころ知った。今でもそのぼやけた楽譜は目に焼き付いている。食事もおアズケ。こう書くと鬼のような母に聞こえるだろうが、ただ「きちんと」習わせようとしただけだと思う。それが、たまたま楽器だったのだ。

言うまでもなく、今では計り知れないほど感謝している。

母との二人三脚は10歳を境に終わりをとげた。下の弟達に手がかかりだした、というありがちな理由からのような気がする。僕の自主性に任されてしまったわけだが、もう少しだけ付き合ってくれていたなら、そのあとの練習曲の進みがはやかっただかもなあ、と思うこともある。前述したように母はステージママではなかったのだ。しかし、音楽大学に通うようになって、さらに卒業して成人してもまだ、そのような関係が続いている。「子離れ、親離れ」ができない人もいる。滑稽と思うかも知れないが、幼年期からの楽器をめぐっての親子のかかわりは、まじめに厳しく取り組むほど深いものになるので理解はできる。自立のタイミングはむずかしい。

親からしごかれたのは少数派かと思っていたら、大学に入ってすぐの飲み会で全員同じ境遇をたどってきたと判明した時には安心し、なぜか嬉しかった。

ピアノやヴァイオリンは3、4歳から始める(始めさせられる)人がほとんどで、物心がついたころには既に「練習」も日常の一環として組み込まれている。僕は本当に練習が嫌いでも同じだ。期

末試験の勉強のように、ぎりぎりまで放っておいてしまう。「明日から勉強(練習)だ!」の繰り返しなのだ。けれど、困ったことに練習は嫌いだが発表会は大好きだった。それは今も同じ、コンサートのたびに嬉しくて仕方がない。

僕は一人で弾くより、人と一緒に演奏するのが好きだ。少人数のアンサンブル(室内楽)からオーケストラまで面白さは様々。室内楽ではひとりひとりの音のやり取りがスリリングだし「こう言えば、ああ言う」というようなキャッチボール、朗々とチェロが弾いているところへ茶化した笑顔でヴァイオリンが参入したり、怒りのフレーズにヴィオラが慰めに入ったりと、まさに「ポケとツッコミ」なのだ。オケは室内楽のような小回りは利かないが、いろいろな楽器の音色は万華鏡のようだし、地響きするような音から絹のような繊細な音まで、色彩溢れるダイナミックな表現力を発揮する。

気心の知れた仲間との共演は格別だ。またその一方、共演する事で新しい友達が増える。逆もあるのだが…。一緒に弾く事でお互いの音楽性(=人間性)をさらけ出すわけだから、話をしたり飲みに行ったりするより簡単にお互いが判ってしまう。音は正直で人柄や生き方すべてを顕わすから、全部ばれてしまう。共演をきっかけに結婚する人が多いのもうなずける。久しぶりに学生時代の労苦を共にした友人と弾くと、昔と変わらない夢をお互いで再認識できたり、今の暮らしぶりが知れて面白い。目指す方向に、ぶれがなく、魅力が増しているのに接すると心強くもあり、励みになる。音楽を通しての仲間はいつまでも大切にしたい。

まさか息子が音楽家になるとは思っていなかった親だが、今でもお正月に帰省するたびに「練習してるの?」と心配そうだから笑ってしまう。子どもの頃とかかわらず、発表会と同じ興奮を味わい続けていられる僕は、本当に幸せなので、今年からそろそろ、気を引き締めて「練習」しようかなと思う。



森下幸路(もりした・こうじ)/ヴァイオリン奏者

シンシナティ大学特別奨学生としてドロシー・ティレー女史に学び、桐朋学園大学卒業。92年まで安田謙一郎弦楽四重奏団のヴァイオリン奏者を務め、2000年まで仙台フィルのコンサートマスターとして活動。ソリストとしても全国でリサイタルやギターの福田進一氏との全国ツアー、また「10年シリーズプラス/森下幸路リサイタル」では多くのファンを魅了し続けている。大阪交響楽団、浜松フィルコンサートマスター、大阪音楽大学特任教授。

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールをフェニックスタワー内に設けています。芸術・文化の発信基地として、関西の芸術文化発展に寄与しています。

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10 あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー5F TEL 06-6363-0211

Copyright(C) 2011 The Phoenix Hall All rights reserved. 本誌に掲載された記事、写真、イラスト等の無断掲載を禁じます。

発行年月 2015年1月
発行 あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
編集 吉元 晃
デザイン 松井桂三有限公司

